

# フットパスボランティアスタッフ 海外先進地視察研修報告



フットパスボランティアスタッフとして活躍されているボランティア事務局次長の辻野治子さんとボランティア事務局の新川雅幸(企画調整課)の2名が、フットパスの本場イギリスを訪問しました。その視察報告(要約)を紹介します。

○視察場所：イングランド北部 ○時期：5月25日～6月2日

5/28

## ニア・ソーリー



今回の視察研修先は、イングランド北部にある国内最大の国立公園の湖水地方。

本日は、ボウネスからニア・ソーリーを経由し、ホークスヘッドまでのフットパスを歩きます。

ホテルを午前10時に出発。ウィンダムニア湖畔の幅2mほどの道を進む。この辺りは観光の中心地でコース沿いにはブナもあり、真っ青な湖水と草木の緑が映え、美しい風景が広がります。

フェリーで湖を西岸に渡り、フットパスを再開。森林内のコース途中、石垣が低く造られ、湖全体を眺望できる高台がビューポイントとして整備されるなど、コースづくりの工夫を感じられます。

午後1時、ニア・ソーリーに到着。ナショナル・トラスト(民間の環境保護団体)が管理運営するパブで昼食を取り、ホークスヘッドへ向かいます。丘陵地帯が続くコースを進むと、小さな湖に着きました。湖の辺には、放牧された羊が草をはみ、野鳥が飛来する姿を見ることができました。

午後5時にホークスヘッドに到着し、バスで宿泊地のアンブルサイドに戻り、約13kmの行程となりました。



▲ウィンダムニア湖畔のフットパス



▲高台のビューポイント

5/29

## ワンスフェルバイク山



本日は、アンブルサイドから標高484mのワンスフェルバイク山を登り、トラウトベックを目指します。

午前9時30分出発。市街地郊外の沿道には、芝生の管理が行き届いたB&Bが数軒建ち並んでいます。

山道の入口には、この地方で屋根や壁に使うスレートを利用した階段が設置されています。山道にもスレートを敷き歩行の安全を確保している様子に、地元資源を活用したフットパスの整備を見ることができました。

山は、予想以上に高くそびえ、登山といえるほどの険しい道が続いています。

午前10時50分、山頂に到着。眼下にウィンダムニア湖が見下ろせる絶景。山頂には、休眠で遠方から訪れた家族連れなど多数の登山者が休憩しています。下山途中も、楽しそうにスタイルを登る少年とその家族、年配の夫婦や犬を連れられた男性などが行き交い、多くの方々がフットパスを歩き楽しんでることを実感できます。

正午、トラウトベックに到着。昼食を取ったあと、アンブルサイドに戻りました。

ホテルには午後3時40分に到着。約10kmを歩きました。



▲スレートを利用した山道



▲スタイルを登る少年とゲートをとる家族

5/30

## グライズティール森林公園



午前9時10分、本日のフットパスの出発地ホークスヘッドヒルへ向かいます。

今日のコースは、2千haある広大なグライズティール森林公園の中を通りコニストンまでの約10km。

森林公園までは、牛の放牧地の中を歩きます。放牧地と道路や森林の境には、牛とフットパス用の2種類のゲートが設置されています。

午前11時30分、森林公園に到着し、園内を散策。子供たちの興味を引く、昆虫のモニュメント、木製の打楽器やオブジェなどが置かれ、園内には打楽器の音がこだましています。

昼食は、子ども達が遊ぶ広場で取り、コニストンへ向かいます。

コース沿道には、ブナの垣根が連なる光景を目にしました。ブナのまちである本町のフットパスコースに整備すると、魅力がもっと高まるものと考えさせられました。

午後3時20分にコニストンに到着し、バスでアンブルサイドに戻りました。

今日歩いた距離は約10kmということですが、体感ではもっと歩いたような気がしました。



▲牛とフットパス用の2種類のゲート



▲園内の木製打楽器

## 視察をとおして

本場イギリスのフットパスが、人々の生活や余暇の楽しみとして根付いていることのほか、その地域にもとある自然、景観、中跡名勝といった資源を大切に保全しながらも、有効に活用されていることを実感しました。

バブやレストラン、B&Bやホテルなどの観光産業とも上手に結び付き、地域経済の活性化につながっていることは、今後、本町フットパス事業の展開に大きなヒントとなり、まだまだ魅力を上向きにできる可能性を秘めていることを確信できました。



▶飲食の提供以外にコニスティールの場としての役目を果たしている市街地のバブ



▶地元産のスレートを3種類の神器で整備されている市街地のバブ



▲羊の放牧地の中を通るフットパスコース  
これまで以上に本町の自然豊かな景観を堪能できるように、牛の放牧地を新たなコースとして利用することも、フットパスの魅力向上策の一つになることを教えられました。